

財政制度等審議会は、二〇一四年の五月に「財政健全化に向けた基本的考え方」を発表した。その概要を示すと次のとおりである。

「家計が保有している潤沢な金融資産と企業部門の資金余剰があるから、多額の国債を低金利で発行できている。」

しかし、国内の資金環境が将来にわたって確実に維持される保証はなく、国債発行額を減らして債務残高を圧縮し、財政リスクをできるだけ少なくする必要がある」

さて、この認識は正しいのだろうか。

国債発行の実際

前々回のこのコラム（本誌九月号）で「国債が将来へのつけ回しでない証明」と題して、建設国債一〇〇億円発行とその事業におけるお金の流れを説明した。ここで明らかになったように、「国債発行によって国民から現金を吸い上げることはない」のである。

したがって、家計や企業に資金余

うな物々交換の代替制度」として貨幣が誕生したのではないとの見方が有力になってきた。

前回は紹介した日本銀行の雨宮正佳副総裁の「国債は銀行が保有する分については、信用創造を通じて預金が増加する（預金という貨幣になる…筆者）」との答弁をよく理解しておきたいのである。

お金は信用の証として生まれたのである。ニッポン放送の「大石久和のラジオ国士学入門」でも紹介したことがあるが、家庭菜園の野菜の交換でお金の誕生を考えてみよう。

Aさんが夏にトウモロコシを作っていた。Bさんはそれを欲しいと思いい、自分が冬に作る大根と引き換えたいと提案した。Aさんは「Bさんを信用していたので」、Bさんが書いた「冬にとれる大根を一〇本渡します」との証文と引き換えにトウモロコシ一〇本を渡したのだった。ここまででは、この証文は借用書にすぎない。

秋が来てAさんは立派な秋なすを作っていたCさんに出会った。この秋なすが欲しいのだが、渡すこと

経済学の実験場

国土学アナリスト 大石 久和 Hisakazu Ohishi

下言上用

Kagen
Jouyou

利があるかどうかは、国債発行に関して何の影響も与えないのだ。つまり、上記の財政制度等審議会の認識は間違いということになる。これについての端的な証明がある。

それは、この三〇年間で「政府債務残高は大きく伸びて一、〇〇〇兆円というレベルに達してきたが、長期国債金利はこの間一貫して下がり続け、最近では〇%あたりに張り付いている」という事実である。

金利が低下しているということは、国債発行が民間への資金供給になっっていることを示しているのだ。この事実は、前々回に見てきたとおりなのである。

したがって、よく言われるような「政府が事業を増やすと民間が低い金利で使えるお金が減ってしまう」という新自由主義経済学のクラウディングアウト論は間違いであることも明らかで、真実はその逆でインフラ投資が民間投資を誘発するのである。

これを一例に用いて解説すると、関東で首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の整備が進んできたが、

ができるトウモロコシはもう持っていない。そこでCさんにBさんの証文と引き換えに、秋なすをもらうことにした。

Cさんは、Aさんが「Bさんは約束を守る」と言っていることを信じられるほどにAさんを信用していたので、Bさんが書いた冬に大根を渡すとの証文と引き換えに、Aさんに秋なすを渡したのだ。

ここで、証文は交換の媒介となる「貨幣」になったのである。信用がお金を生んだのだ。これは、新自由主義経済学の唱える物々交換ややがて貴金属貨幣を生んでいったという話とはまったく異なる貨幣誕生説である。シュメールの記録から見ても、貨幣の誕生はこの説の方が歴史の根拠がありそうなのだ。

現代貨幣理論(MMT)がわが国に紹介され、その是非をめぐって、わが国でもにぎやかな議論が続いているが、経済学の主流派はほとんど無視する態度を取っている。インフレ率を考慮に入れて財政運営している限り、政府の歳出は税収の範囲にこだわる必然はないとするこの

この道路の開通区間では物流施設などが急速に立地し、土地利用の高度化、雇用の急増、固定資産税などの増収などが実現してきた。

つまり圏央道が民間投資を生んで、人びとの働く機会を増大させ、中央や地方の税収を増やしてきた。インフラ整備によるクラウディングインなのである。

貨幣とは何か

先ほどの財政制度等審議会の表現は、貨幣をモノとして捉え、モノであるからどこかに蓄えられ、それはプールに水がたまっているようなものだとして示している。物々交換から、貴金属貨幣となり、それが兌換紙幣から不換紙幣へと変化して今日に至っていると考えてはいるが、どこまでも「貨幣はモノ」との理解なのである。

しかし、最近では^{*}シュメールの時代に記された粘土板を見ても、貨幣は信用の証だったことが知られるようになった。そして、アダム・スミス以来の「古典派経済学が主張するよ

理論は、財政再建主義に縛られアライマリーバランスばかりを気にしているわが国の財政方針と大きく異なるから、受け入れることができないのである。

MMT論者のステファニー・ケルトン氏が日本で講演したときに、質問者がほとんどすべて大インフレの懸念を述べたから、ケルトン氏は「二五年もデフレが続いている国でインフレの心配ばかりするなんて」と笑っていた。

ある人が日本をMMTの実験場にはしないと述べたが、既になっているのだ。発行残高が一、〇〇〇兆円にも上る政府債務が積み上がっているのに、国債金利は上がるところか下がり続けているし、消費者物価も上昇せずインフレ傾向はさっぱり見られない。これを新自由主義経済学は説明できないのである。

このように、わが国は非現実的な財政再建至上主義の新自由主義経済学にとつぷりと浸かっているために、国家の劣化と国民の貧困化が進んでいるというのが実相なのである。

^{*}シュメール：紀元前に世界最古の都市文明が興ったメソポタミア南部（現在のイラクの一部）の地域を指す。この地に住んだ人々はシュメール人と呼ばれ、楔（くさび）形文字や貨幣などを創造したと言われている。